無用の長物 グリーンランド

勝手に社宅をとり上げるな 三井のための観光事業

荒尾の曙光か?

昨年の十一月二十九日付朝日新聞(熊本版)に、「消える三井三池の大谷社宅」という見出しの記事があった。この記事によると、三井開発の「三井グリーンランド計画」は四十七年九月完成を目ざし、総面積二五〇万平方メートルで、このうち約半分がゴルフ場となり、最終計画で三十六ホール(現在九ホール)。これに遊園地、ブドー園、動物園などを合わせて、世界一の規模になるというものです。

この基本構想については、すでに二年前の三月三十一日付西日本新聞に、三井開発の発表したものがありますが、現在開発側は工事の六割以上が進渉しているといっています。また古閑荒尾市長は、この新聞記事の後「産炭地振興、新産都市建設のどれもが見通しが暗いいま、グリーンランド建設は荒尾市の発展にとっての曙光である」と語り、積極的に応援する態度をとってきました。

皆さん、はたしてそうでしょうか。グリーンランドの建設が、貧困と失業の町といわれる荒尾市の労働者、農民、市民の生活を守り豊かにするのでしょうか。

三井の遊休地というが

二五〇町歩におよぶこの土地は、もともと地元農民のものです。戦争前、三井は天皇制権力を背景に、憲兵と警察を使って、軍需工場用地として坪二十銭という夕ダ同然の値段で強制收用した土地であり、戦後は、当然農民に返すか、市民に解放するかしなければならない性質のものなのです。

しかも長年にわたって固定資産税なども不当に安く徴集され、三井は荒尾市のど真中を握りつづけたのです。その結果、朝日ガ丘団地とともに発展を約束されていたのにそのまま放置され、市の団地はヘンピな所を高い金を出して開発せねばならなくなっています。この「いわく」つきの土地を、わがもの顔に三十五億円の資金を投じて開発しようというものです。

赤字で税金をとり

年間百万人の観光客を集めると豪語し、グリーンランドを建設する三井開発は、もちろん三井鉱山の系列にあり、自からも子会社といっています。

石炭合理化政策は、炭鉱をつぶし、失業者を大量に作り出すとともに、一方では大独占の背景の下で、あらゆる層の中小企業をつぶし、多面的に各産業に手をつけてきました。その資金は労働者と市民から捲きあげたものにほかなりません。石炭会社がもうからなければ国有にでも投げだすはずですが、そうはしません。それどころか、異状負債肩替りという名目で一千億の血税を手に入れました。いわゆるグリーンランドに注ぎ込まれる資金もこのようなものです。

また三井鉱山は、荒尾市に、国税、市税とも「利益なし」として一銭も払わず、均等割の三千七百円しか納めていません。こんな資本がやる観光事業、それは市民の犠牲をさらに強要するものであることは明白です。

「取りつぶし」では たまらない

大谷社宅の東二十二戸の立ち退きを申し入れてきたのは、昨年の八月でした。十月までという期限つきでしたが、私たちの分会員三戸を残して、他の方は不本意ながら転宅料一万円で十月に移転しました。大谷社宅といい、朝日ガ丘団地といい、もともと前坂田市長時代の計画では、社宅の中をバスが通り、この広大な土地を買收、開発してニュータウンが生まれるはずでした。それをいまは、三井グリーンランド計画による「取りつぶし」を強要されているのです。従来、不便なこと、環境の悪さを指摘されてきたこの地区は、特にここ数年来、精神的・物質的に多大の犠牲を強要されてきたのです。それは

(イ)遊園地内を通っていた、極めて公共性の強い山際大谷線の道路を廃道にした。

(ロ)事実上グリーンランド道路となる県道を、一億円の税金を支出して補装した。

(ハ)山際の農家、農地を買收した。

(ニ)池黒の住民がすでに二回、強制移転させられた。

(ホ)工事中、ブルトーザーによる道路、側溝の破損、騒音、加えて私有物埋没、土砂の崩落などの被害続出。

(ヘ)ゴルフ場への土砂運搬によるカミカゼ運転と、砂塵による被害

(ト)戦前からの耕作地が取り上げられた。

等々です。

このうち当事者との間で諒解されたものもあるが、すべて不本意なものであり、もちろん若干の補償をしたから住民に迷惑をかけないということには絶対にならないと考えます。

グリーンランド計画 粉砕しよう。

新聞報導によると、大谷社宅は「四十四年中に立ち退き」とあります。したがって、現在いくつかの当然の要求を挙げて交渉している東三戸の問題は、将来大谷社宅全体にかかわる重大な問題です。さらに将来起こり得る問題として百戸の市の団地買收問題、社宅内を通ずる市道問題、荒尾四小、五中の児童数減に伴う縮少問題、ブドウ園、ミカン山拡張による中小業者への脅威など、いずれも市政の重要な問題であります。皆さんこのように「グリーンランド」建設は、荒尾市発展の曙光などという代物どころか、労働者、農民、市民の犠牲の上に計画された「無用の長物」です。みなさん、春闘の中で大幅賃上げをはじめ諸要求をかちとり、「グリーンランド計画」を糾弾しましょう。

【大谷地域新聞より】

CO闘争の中から　第三回

これから先 いつまで苦労が続くのか…

CO家族の会　石原まさ子さん

石原まさ子さん(四十五才)のご主人軍喜さん(五十三才)は、昭和三十八年十一月九日の三川鉱大爆発によって、CO中毒患者になされ現在は久留米大学病院に入院中である。昭和四十一年の打ち切りによって「一時経過観察者」と判定された。まさ子さんはおばあさんのジユキさん(八十才)と長女の澄子さん(二十二才、福岡で就職)次女の悦子さん(十九才、名古屋で準看護婦として働いている)のご長男の守さん(十五才、高校一年生)とともに生活とご主人の治療をかちとる苦しい闘いをつづけてきた。

方言でもわかる訴え

四年間のCO闘争は石原さんにとって少しも「気を安める」ものにはならなかった。

「いまから先、どれだけ苦労がつづくのか……」と思うと「一時経過観察になっているご主人の軍喜さんの治療も、家族の生活も不安」べった大牟田弁でしゃべったのでわからないだろうと思ったら「わからない言葉もあと先き考えたらわかるワ」といわれてうれしかった。案内してくれた主婦会の会長さんがあとで「いつも集会のときはみんな早く帰ろうといいだすのに、今日のように何回も〝これで終ります〟といっても帰らなかったのははじめてだ。こんなに集まったのもめずらしい」といわれた。その晩はさみしさを通りこしてうれしかった。

守る会はできるやろか

この四年間は内にも外にも苦労が多かった。「守る会はできるやろか」と不安がるCO家族が多いが「三池労組やけんできるくさい」と答えている。

それでもオルグにしろ抗議行動にしろ必死に闘った。

一番苦労したのはオルグだった。昭和四十一年の労災補償打ち切りのときは、北海道にオルグにやられた。

生れてはじめてのオルグなので何を話していいのか?こんなことを話してもわかってくれるのか心配だった。

最初に行ったのは美唄の主婦会の集まりだった。北海道に行くまでは三人一緒だったが実行動に入るときは一人ひとりになった。

深い雪の中を社宅の集会所に集ってきた奥さんたちに「私は話すのはじめてだから……」と前置きして、とにかくお父さんの現状を話しみんなに支えてもらわねばならないということを方言でしゃべったのでわかるだろうと思ったら「わ

写真は東京で訴えるCO家族たち

死亡災害補償百二十万円を獲得

全鉱の三菱・同和、無期ストで追込み解決

全鉱(原口幸隆委員長・三万人)は賃金闘争の本格化以前に労仂協約、労仂災害、転業病補償闘争の決着をつけるたてまえで、全国統一行動日の二十六日に三菱、三井、住友、同和、古河の五企業連が二十四時間ストライキを決行ひきつづいて二十七日から「役割り闘争」(チャンピオン闘争)として三菱、同和の重点単組の重点部門が無期限ストに入った。

この無期限スト突入のなかで、同夜七時、現行五十万円の死亡災害補償金を世帯持百二十万円、独身者九十万円に引き上げるなど大幅な進展を見せ、三菱、同和の闘いは解決した。

なお他の企業連は二十八日昼現在、二十九日のスト突入を前提に交渉を煮つめており、三菱、同和の妥結点に到達するものと見られる。三菱、同和二企業連の妥結状況次のとおり。

一、死亡災害補償金　世帯持・百二十万円(現行五十万円)▽独身者・九十万円(現行五十万円)

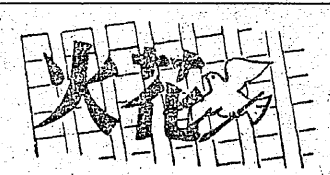
二、傷害補償見舞金　一等級で世帯持・百二十万円、独身者九十万円、二〜七等級については各企業連毎に協議して決める。

三、有給休暇　年間定額四千円を支給する。名称・性格・支給期日等については各企業連毎に協議して決める。(会社側は有給休暇の増加は拒否したが、それの見合い額として四千円支給するというもので、二〜三日の休日増に当る)

四、深夜割増率　率ではなく額の引き上げで、三の方手当七十円にする(現行〇〜五十円)。

静岡の仲間が「三池の闘い」を上演

全電通うたごえサークルの手で



〝みいけの闘い〟を、そのうたごえ仲間たちが自分たち独自の力で上演し、成功したのである。

去る二十日静岡市公会堂で、同県の青年労働者を結集、団結集会が開催された。春闘への結集をめざすその集会に、とくに招かれた宮川組合長が出席、三池におけるCO闘争——について報告することができた。その宮川組合長が「まさか……」とおどろいたというが、なんとその日の催しの第二部に、合唱詩劇・三池の闘いの熱気あふれんばかりの舞台が飛び出してきたのである。

こんど全電通静岡の労働者が、おどろくことをやってのけた。同地のとある集会の舞台で、三池が生み出した合唱詩劇

全電通静岡のうたごえ仲間によって同詩劇の上演準備がすすめられているらしいうわさは、一月の三池に学ぶ全国集会の際、三池にやってきた静岡の労働者によって伝えられてはいたものの、はたしてそれが実を結ぶかどうかについては疑問ももたれたものだった。それだけにその計画が見事に実を結び、しかも三池の労働者の手によって上演されつづけている同合唱詩劇をよく知る宮川組合長がびっくりするほどの素晴らしい舞台をつくりあげ、大カッサイを呼び起こしたと聞いては、宮川組合長ならずともおどろかずにはいられない。

全電通静岡分会の手による同劇は、近く岐阜県にまでも進出する